チリ・カトリカ大学経済研究所

（Instituto de Economía, Pontificia Universidad Católica de Chile）

北野浩一

筆者が赴任しているチリ・カトリカ大学（Pontificia Universidad Católica de Chile: 以下 PUC）とアジア経済研究所との間で，2010 年 5 月に研究協定覚書が取り交わされた。同大学とはこれまで個別の研究者レベルでの研究交流があったが，大学が機関としてアジア経済研究所と学術交流を促進することを決定した意義は大きい。経済学研究の面ではチリ国内だけではなく，ラテンアメリカの中でも有数の大学であるが，発展途上国研究者のなかでは途上国で最初に新古典派的経済政策を導入した「シカゴ・ボーイズ」を輩出した大学として知られる。この報告では，「シカゴ・ボーイズ」の母体となった経済研究所の現状を中心に PUC について紹介する。

PUC経済経営学部校舎正面

1. チリ・カトリカ大学の概略

チリ・カトリカ大学は，1888 年に設立されたチリで 2 番目に古い大学である。生徒の入学成績や教授の論文生産性など各種大学ランキングでも国内では国立のチリ大学と双璧をなし，ラテンアメリカ全体でも 5 指に入る名門校である。学生数は 2 万 2848 人，専任教授は 2789 人と規模も大きく，学部は神学部から宇宙工学部まで 18 学部あり，ほぼすべての学問分野を網羅している。

現在のキャンパスはサンティアゴ市内 4 カ所に分散している。本部はサンティアゴ旧市街にあり，100 年以上の歴史がある建物を現在でも利用している。経済経営学部があるのは，サンティアゴ中南部のサンホアキン・キャンパスである。ここは 51 ヘクタールという広大な敷地を有し，同学部を含め 12 学部と中央図書館，運動施設などが集まり，学生数は 1 万 4000 人と最大のキャンパスである。

校風は，比較的保守的とされる。校名にもあるとおりカトリック教会との関連が深く，現在でも学長は教皇庁からの任命の形式をとっている。歴史的に右派政治家を多く輩出してきたが，2010 年 3 月に発足したピニェイラ政権では，大統領自身が PUC 経済経営学部の出身であり，20 人の大臣のうち同大学卒業生は 17 人とほぼ独占している。さらに，現政権の大臣はテクノクラートが多いという特徴があるが，特に PUC 大の教授職の経験がある大臣が 7 人も含まれていることは特筆に値する。

2. PUC経済研究所のチリにおける役割：「シカゴ・ボーイズ」の虚像と実像

PUCに経済学部が創設されたのはチリ大学の2年後の1941年である。当時のチリでは，まだ経済学が学問として認識されておらず法学部や数学部の附置的存在で，会計知識の習得を主とし経済理論専門の教授もほとんどいなかった。それでも，チリ大学は政府の補助を受け外国から教授を招聘するなどして学問水準の向上を図っていたが，PUCは1940年代を通して教授の陣容や学生のレベルでみて劣っていた。

このようなPUCの状況に転機が訪れたのは，有名な1956年のシカゴ大学との学術交流協定締結である。これは，米国政府の「ポイント・フォー」計画の枠組みで，米国援助庁が資金を提供し，シカゴ大学経済学部が留学生受入校となり，PUC側は留学生を送り出し，帰国後彼らを専任の教職として採用するというものであった（Larroulet y Domper[2006: 8]）。この計画は，1958年に3年延長されて最終的には1961年まで続いたが，その間30人のチリ人学生が奨学金を受け，シカゴ大修士・博士課程で学んだ。国際的協力の枠組みであっても，チリ人留学生が他の学生に対して特に優遇されていたわけでもなく，むしろ英語が不自由で，かつ経済学を学ぶのに必要な数学の準備も足りなかったため，相当の努力が必要であったようである（Rosende[2007]）。帰国後の学生の多くはPUCの教授として採用され，1963年にはPUCに当初の計画を上回る15人のフルタイム教授が誕生している。帰国後のシカゴ大卒業生は，同大学で得た経済学の知識とカリキュラムをPUCに導入した（Fontaine[2009]）。教育面では特に数理理論面と実証面を重視し，これまでの理念や思想・主義に偏った経済学から科学としての研究手法へと転換している。

しかし，「シカゴ・ボーイズ」の名が一般にも広まったのは，むしろ軍事政権への政策決定過程への参加が強まって以降である。1973年に左派のアジェンデ政権をクーデターによって転覆させ発足した軍事政権では，当初からその経済政策立案にシカゴ大卒業生が関与し，デ・カストロを中心に彼らの発言力を拡大させていた。公共政策のあらゆる分野への市場メカニズム重視の政策の導入は，シカゴ大を代表する経済学者であるミルトン・フリードマンやハイエク流の市場メカニズム信奉を想起させ，実際にも軍事政権期に重用された経済学者は50年代後半の奨学制度利用者が含まれていた。このことから，「米国が中南米の左派打倒のため対外援助の名で，チリ人学生を米国右派の拠点シカゴ大に送って洗脳し右派的政策を導入させた」，という神話も生まれている（Rosende[2007: 40]）。しかし，実際にはフリードマンは留学生達にとっては近寄りがたい存在だったようで，あまり接触がなく，ハイエクに至っては堅物で会話も交わしたことがなかった，と語られている。一方で，国際経済や公共政策が専門のハーバガー教授は，留学生達にとっての「メンター」的存在であり，留学生達が帰国後もほぼ毎年PUCを訪問するなど，精神的，学問的に強い影響を与えている（Fontaine[2009]）。

「シカゴ・ボーイズ」の実像については，多くの誤解がある。「シカゴ・ボーイズ」のリスト原典として繰り返し利用されているDelano y Traslaviña［1989: 32-36］には26人が掲載されているが，実際にそのリスト中で「ポイント・フォー」計画で留学しシカゴ大で経済学博士号を得たのは，現PUC教授のロドルフォ・ルーデルス1人のみである。他の面々は，例えば「シカゴ・ボーイズ」の中心とされ軍事政権の経済チームを率い

たセルヒオ・デ・カストロはシカゴ大で修士課程を終えたが，その後博士号は思想的によりリベラルといわれるハーバード大経営学部で取得している。また，多くは同計画終了後に，ロックフェラー財団やフォード財団，チリ政府機関・カトリカ大卒業生財団の奨学金を受け，先の協定とは関係なくシカゴ大学を選び，また経済学ではなくMBAコースを卒業した者である。シカゴ・ボーイズ第二世代の旗手として「チリの奇跡」を演出したとされるエルナン・ビュヒに至っては，学部はチリ大学社会工学部で，最終学歴はコロンビア大学の経営修士であるように，カトリカ大ではなくチリ大学など他大学卒業生までも含まれている。一般に言われている「シカゴ・ボーイズ」というのは，学歴上の属性というよりは，軍事政権に登用された米国留学組テクノクラートと呼ぶのがふさわしい。当初の大学間協定でPUCからシカゴ大学に留学したルーデルス教授と，最近他界されたハチェット教授は，かねて「自分たちこそ本当のシカゴ・ボーイズで，他は違うのが多い」と冗談交じりに主張していた。それでもピノチェト軍事政権を支えた「シカゴ・ボーイズ」という名前が独り歩きしているのは，初期の留学組であるデ・カストロ，フォンテーン，フエンサリダ，ルーデルスなどがPUC経済学科の講義や企業家向けセミナー，あるいは政権内での政策立案を通して，シカゴ大で学んだ経済理論をチリで普及させることに多大な影響力があった結果ともいえる（Fontaine[1988]）。

3. PUC経済研究所の現在

チリは1990年に民政移管が行われ，政治の面で民主主義が回復してきたが，経済政策では軍事政権に導入された，マクロ経済安定の重視と，経済自由化という原則を堅持し続けている。これは，経済政策の面では左右のイデオロギー対立の壁が低くなっていることを示している。

経済学界では，従来の分類ではチリ大学は構造主義やケインジアン優勢，PUCは新古典派で価格メカニズム重視という対立軸があったが，現在はいずれも標準的な経済理論に基づく実証的アプローチをとっており，分析手法も同じ米国流の経済学であることから，大学間の違いは見出しにくくなっている。講義のカリキュラムもいずれも標準的なものとなっている。専任教授陣の最終学歴を見ると，博士号・修士号を合わせるとシカゴ大学が10人で最も多いが，博士取得者だけでみればすでにMITの方が多く，またUCLAやハーバードといった比較的リベラルな大学卒の教授も含まれている（表1）。

それでも，PUC経済研究所の学派のようなものが形成されるとしたら，火曜と金曜に開催されているセミナーの役割が大きい。ここでは，PUCの教授だけでなく他大学の教授などによる研究報告がなされ，参加者からは理論であいまいな部分や実証方法の正当性について厳しいコメントが出される。また，3階の教授専用食堂でほぼ毎日開催されるラテンアメリカ流の長い（時には2時間以上に及ぶ）昼食時の団らんが，インフォーマルだが密な情報交換の場となっている。

チリでは1990年に高等教育法が改正され，現在私立大学の設立ラッシュともいえる状況である。なかでも上級経営者育成のための経営学科やMBAコースは人気が高く，高額な授業料にもかかわらず，最新の校舎と大規模な広告などで生徒を集めている。PUC経済経営学部は，現在でもチリで最も優秀な学生を集めているが，チリにおける良質の高等教育の普及とともに，かつてのような独占的な優位性を保てなくなっている。一

表 1　PUC 経済研究所専任教授の最終学歴

大学名	博士	修士
MIT	5	
シカゴ大学	4	6
UC ロスアンジェルス校	2	
ジョージタウン大学	2	
カトリカ大学	2	
カーネギー・メロン大学	1	
コーネル大学	1	
ハーバード大学	1	
ミネソタ大学	1	
スタンフォード大学	1	
UC バークレー校	1	

（出所）PUC 経済研究所 HP（http://www.economia.puc.cl/）2010 年 10 月 1 日閲覧。

方で，新設大学へは PUC 卒の経済学者が学長や学部長など主要ポストを占め，科学的・実証的な経済学と企業経営への実践的アプローチという PUC の特徴は，むしろ普及しているという見方もできる。

最近報道されたデータによると，チリ大企業の社長のうち，PUC 卒業生の数は 50％と最大で，第 2 位（35％）のチリ大学を大きく引き離している（エル・メルクリオ紙 2010 年 7 月 25 日付）。企業との結び付きも強く，企業の取締役に名を連ねたり，企業のコンサルタントとして経営助言を行っている教授も多い。チリにおけるエリート層のネットワークの強さは良く知られるところであるが，今日 PUC 経済研究所の最も大きい資産は，これまで政界・財界に輩出してきた優秀な人材とのネットワークの強さではないかとみている。

参考文献

Bardón, Alvaro, Camilo Carrasco y Álvaro Vial［1985］ *Una década de cambios económicos: La experiencia chilena 1973-1983*, Santiago: Editorial Andrés Bello.

Fontaine, Arturo［1988］ *La historia no contada de los economistas y el Presidente Pinochet*, Santiago: Zigzag.

Fontaine, Ernesto［2009］ *Mi visión sobre la influencia del Convenio U. Católica-U.de Chicago en el progreso económico y social de Chile*, Santiago: Instituto Democracia y Mercado.

Delano, Manuel y Hugo Translaviña［1989］ *La herencia de los Chicago Boys*, Santiago: Las Ediciones del Ornitorrinco.

Rosende, Francisco［2007］ *La escuela de Chicago: Una mirada histórica a 50 años del convenio Chicago/Universidad Católica*, Santiago: Ediciones Universidad Católica de Chile.

（きたの・こういち／チリ海外調査員）

教会を思わせる経済経営学部校舎の内部